學　報
Kobe　College　Bulletin

ISSN0389－164X
NO. 1 8 2
2018. 3 .12
神戸女学院
学報委員会

院長退任のご挨拶

理事長・院長　森　　孝一

今年３月末の任期満了をもって、二期８年務めさせていただきました理事長・院長を退任させていただくことになりました。

私と神戸女学院との関わりは、門戸に住んでいた学生時代、神戸女学院に学んでいた妹、そしてその同級生のみなさんと知り合った時から始まっていました。大学院修士課程在学中に中高部の非常勤講師として授業を担当したことがご縁となり、修士課程修了後に中高部聖書科の教諭となりました。２年４ヶ月、短い間ではありましたが、生徒たちの聖書の授業を担当しました。その１年目にはソール・チャペルで中高大の卒業生である妻と結婚式を挙げ、時を経て、娘もまた中高部にお世話になりました。

アメリカの大学院への留学が決まって中高部を退職。足かけ４年にわたる留学から帰国した後は、母校の同志社大学神学部の教員として32年間、アメリカ宗教史の研究と教育にあたってきました。

2009年夏、国際会議のためにウィーンに滞在していた時に、ホテルで院長選任が決まったというメールを受け取りました。びっくりいたしましたし、迷いましたが、これも神様のお導きだと思ってお引き受けすることにいたしました。

2010年４月、37年ぶりに神戸女学院へ帰ってきた私が、135年の歴史が作り上げてきた、神戸女学院の「資産」ともいうべき伝統のすばらしさを改めて実感したことを、８年前、2010年の『学報』に綴らせていただきました。一部を引用いたします。

> 第一の資産、そして最大の資産は、「愛神愛隣」の永久標語に表されている、キリスト教を基礎とする人格教育です。本学院だけでなく、建学の精神の形骸化についてしばしば語られますが、神戸女学院は建学の精神をいまも堅持しようという気概を持ち続けているように感じています。
>
> もう一つの資産は、ヴォーリズの設計によるキャンパスのすばらしさです。アメリカにはキャンパスの美しさによる大学ランキングがありますが、もし日本にもそのようなランキングがあれば、神戸女学院は間違いなく第一位にランクされるに違いありません。堅実で気品に満ちたヴォーリズ建築の校舎は、神戸女学院が教育目標とする女性像そのものであると言ってもいいでしょう。この貴重な資産を守り維持するために、最大限の努力をいたしたいと願っています。
>
> 最後にお話ししたい神戸女学院の資産は、卒業生・同窓生に対する社会的評価です。表現を変えれば、「神戸女学院ブランド」の力と言えるかも知れません。

このブランド力があるからこそ、受験生は神戸女学院に入学することに憧れ、社会は神戸女学院の卒業生に敬意を表し、進んで卒業生を採用してきました。

それでは、この「神戸女学院ブランド」の中身とは何なのか？これはなかなか難しい問いです。神戸女学院の教育、環境、伝統などによって、形作られてきたものであり、神戸女学院の「学風」と言うことができるかも知れません。…

世間の風潮に流されることなく、自分で考える力、自分を表現する力を備えた女性。それが神戸女学院の卒業生であると評価されてきました。神戸女学院は「国際主義」を掲げていますが、国際交流プログラムを他校以上に備えているわけではありません。しかし現実に、卒業生の多くは国際舞台で活躍されています。それは、自分で考え、自分を表現する力を備えておられるからでしょう。

今後、神戸女学院はこのようなブランド力を維持できるのか。さらにどうすれば、その評価を高めることができるのか。これが教職員の皆さんと共に取り組むべき、私にとっての最大の課題です。

８年前の神戸女学院に対する私の思いは、今も変わることはありません。いま８年間を振り返るとき、院長就任の時に皆さまに提示させていただいた諸課題に、どれだけの成果をあげることができただろうかと考えると、その不十分さに身のすくむ思いがいたします。

１月の大学チャペルアワーで奨励（お話）の機会をいただいた時、聖書の箇所として旧約聖書申命記３章の出エジプトの最後が記されている箇所を選びました。

40年間の出エジプトの旅の最後、モーセに率いられたイスラエルは、ついに約束の地を目前に見るところまで至ります。しかし、神はモーセにヨルダン川を越えて、約束の地に入ることを許しませんでした。その代わりに、神はモーセをピスガ山の山頂に導き、そこから約束の地の全てを眺めることを許します。

院長を退任するいまの私の心境は、この時のモーセの思いに重なります。８年前の就任のご挨拶で述べた目標の全ての成就を、私は体験することはできませんでした。しかし、その「約束の地」（目標の成就）を見渡すことができる喜びを持つことが許されています。

中高部長を兼任させていただいた2013年、中高部教職員の皆さんとご一緒に、中高部の教育目標を確認いたしました。それは中高部ウェブサイトの「教育方針」のところに、「神戸女学院中学部・高等学部は、こんな学校です」としてまとめられています。中高部の生徒の皆さんは、さまざまな分野において、この教育方針に則った学びを実現してくれていると思います。

大学はどうでしょうか。大学のブランド力を高めるために、多くの大学が実学的な学部増設や資格取得によって受験生獲得を目指しているなかで、本学は創設以来の「リベラルアーツ」を教育の基本方針として打ち出してくださいました。本学のリベラルアーツ教育の内実を考えると、それによって厳しい大学間競争を勝ち抜いていけるだけの制度整備はいまだ完成していません。しかし「日本を代表するキリスト教主義リベラルアーツ女子大学」という目標（約束の地）を明確にしてくださいました。モーセと同様に、私はピスガ山の山頂から、その完成の姿を眺めることのできる喜びを与えられています。

総務館２階院長室の窓からの眺めは四季折々、それぞれにたいへん素晴らしく、忙しい時にも、難しい判断を迫られる事態に直面した時にも心を癒してくれました。神戸女学院にとってかけがえのないこのヴォーリズ建築の継承については、幸いにも2014年に、ヴォーリズ設計による12棟が、国の重要文化財に指定されたことによって、揺るぎのないものとなりました。重要文化財の保存活用について、具体的な方策を打ち出していくための検討が始められています。ヴォーリズ建築だけでなく、今まで以上にすばらしいキャンパス・デザインの実現を、私は夢に描いています。

モーセは約束の地に入ることが許されませんでしたが、新しいリーダーであるヨシュアに導かれて、イスラエルが約束の地へと導かれたように、４月以降、新院長の飯謙先生のもと、神戸女学院が来たるべき150周年に向かって、力強い歩みを続けて行かれますようにと祈っています。

最初に職を得た神戸女学院で、最後の仕事をすることになったわけですが、これも神様のご計画だったのかと思うと感慨深いものがあります。８年間にわたって、皆さまからいただきました温かく力強いお支えに対して、心より御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

KCCだより

［コーベ・カレッジ・コーポレーション（Kobe College Corporation）は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆をしてくださったのは、ミネソタ在住で、渡米する学生生徒をいつもご夫婦でお世話くださっている石田卓三さんです。石田さんは2017年４月29日に旭日小綬章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。］

叙勲の栄誉に浴して。

KCC-JEE 理事、
アドミニストレーション担当副会長
石田　卓三

自分の不手際から神戸女学院学報の KCC だよりの原稿が間に合いそうにない、と言うことで困っていました。院長室の井出敦子様から、昨年平成29年（2017年）の叙勲について、石田さんが原稿を日本語で書いていただくと間に合います、と言われました。自分自身のことを書くのは如何なものかと思いましたが、解決策の一つではある、と思い原稿を用意することにしました。

日本政府の叙勲制度では、日本に住んでおられる日本人の方々以外に、「在外邦人」または「在外居住者」という範疇で日本人受章者も選ばれます。2017年の在外居住者の旭日章受章者は春の叙勲と秋の叙勲を合わせて30名でした。その中でアメリカ合衆国からは１名でしたので、この度の叙勲は身にあまる栄誉だと思っております。私の叙勲対象は、在留邦人への福祉功労と日米文化普及功労と言うことでした。これは、私の職業ではなく、いずれも私のボランティア活動です。学報の読者の方に、私が何故アメリカに来たのか、私の職業は何なのかを簡単に述べたいと思います。

大学院時代に興味を抱いた画像記録技術がたまたま米国ミネソタ州の化学会社で発明されたものでした。この技術の研究開発をやってみたいと思い、その夢を叶えるために、この特許の発明者に雇ってもらいアメリカに来ました。渡米以来、会社勤めを引退する迄、一貫してこの技術の研究開発に携わりました。この技術を使って製品化されたビジネスも年間の売り上げ高が、＄１Billion（約1,100億円）を超えるようになり、アメリカ政府の環境庁（Environmental Protection Agency）から1997年の大統領（当時はクリントン大統領）賞をいただきました。この技術分野で私が取得した米国特許は20以上になります。

ボランティア活動に関わり始めたのは、自分の３人の子どもたちが日本語補習校に通い始めた頃です。学校の運営を担う運営委員長を務めたのがきっかけでした。その後、当時、KCC 会長を務めておられ、ミネアポリスにお住いの Patsy Cooper Gottschalk 氏より、KCC が主催する US-Japan シンポジウムの企画実行委員会のメンバーに誘われました。KCC 主催のシンポジウムは1995年からだったと思いますが、その後、KCC の理事を引き受けました。この KCC への理事を引き受けた頃に、ミネソタ日米協会の理事、そして会長を務めました。私のボランティア活動は、以上のように、ここに住む日本人社会への福祉活動と日米両国の友好親善、交流促進活動が主なものです。これ以外に、日本と直接関係した分野ではありませんが、自分の趣味でもある音楽の団体の理事を務めています。

以上述べましたように、会社の仕事以外にも、いろんな団体の役員（理事）の仕事をボランティアで引き受けてきました。私には、その仕事が会社の仕事であれ、団体のボランティアの仕事であれ、この社会で生きていくうえでの信念、信条というものがあります。かつてのアメリカ大統領 John F. Kennedy の1961年１月20日の大統領就任演説での言葉です。

My fellow Americans:

Ask not what your country can do for you - - ask what you can do for your country. という呼びかけです。「国が貴方に何をしてくれるかを問うのでは

勲記

石田卓三氏

なく、貴方が国のために何ができるかを問おう」というような意味です。皆さんのなかには、半世紀以上も前に言われた陳腐なことを言うと思われる方もおられるかと思いますが、この言葉には、今、聞いても新鮮な響きがあると思います。これは、私たちが住む国という大きな組織だけではなく、私たちの身近にある組織に置き換えても同じことが言えると思います。例えば、自分が属する会社、学校、大学、団体、地域社会、全てに当てはまる言葉だと思います。自分が勤める会社のために自分は何ができるのか、最も貢献できるとしたらどのような分野か、自分が一番やりたいものは何かを常に考えてきました。また、日米両国のために、ミネソタのために、自分が住む地域社会のために、私に何ができるかを考え、一所懸命に実行してきました。その活動の詳細を述べることは控えますが、ボランティア歴とこれまでの受賞歴を記し、これまで私の活動にご支援をいただいた神戸女学院関係者の皆様に御礼申し上げます。本当に有難うございました。

ボランティア歴

所属する、または所属した団体

- Vice-president of Bach Society of Minnesota
  ミネソタ・バッハ協会 理事、副会長
- Member of board of directors, Chamber Music Society of Minnesota
  ミネソタ室内楽協会　理事
- President of Japan America Society of Minnesota
  ミネソタ日米協会 会長、名誉理事
- Vice-president of Kobe College Corporation - Japan Education Exchange
  神戸女学院コーポレーション 理事、副会長
- Founder and president of Minneapolis Japanese School
  ミネアポリス日本語補習授業校 創立者、理事長

受賞歴

1. 米国３Ｍ社技術優秀賞受賞：1983年、1987年、1991年
2. 米国環境庁グリーン・ケミストリー・チャレンジ・大統領（クリントン大統領）賞受賞：会社のプロジェクト・チームとして受賞：1997年
3. 米国ミネソタ州政府の諮問機関からアジア・パシフィック・ミネソタン・リーダーシップ賞受賞：2007年
4. 日本の外務大臣（麻生太郎大臣）表彰と銀杯を賜る：2007年
5. 米国ミネソタ日米協会モンデール賞受賞：2011年
   モンデール氏はミネソタ州出身の政治家、元アメリカ副大統領、元駐日アメリカ大使
6. 日本の旭日小綬章受章：2017年

次期院長に飯 謙教授

森 孝一院長（理事長）の任期が2018年３月31日をもって満了になります。学院では、2017年度５月理事会（５月24日開催）において、理事長を委員長とする15名の委員による院長候補者選考委員会を設置して次期院長候補者の選考手続きを進めました。選考委員会は、専任教職員による第１回推薦投票結果と、めぐみ会、コーポレーション（KCC）からの推薦、チャプレン会議による審査に基づき第１次候補者を決定し、辞退者を除く３名を候補者として第２回推薦投票を行い、３名を院長候補者として理事会に推薦しました。

７月理事会（７月26日開催）で、出席全理事による投票の結果、飯 謙氏を次期院長候補者とし、評議員会、めぐみ会及びコーポレーション（KCC）の承認を得て、同日開催の臨時理事会で飯 謙氏が次期院長に選任されました。任期は2018年４月１日から４年間です。

飯 謙氏は、1955年生まれ。明治学院高等学校から同大学社会学部を経て、同志社大学神学部、同大学院博士前・後期課程及びバーゼル大学で学ばれました。博士（神学）。本学には1983年４月のご就任。1995年に教授、以後、チャプレン、学生部長、評議員を歴任。2009年４月から2015年３月までは学長（理事）の重責を果たされました。

ご専門は神学、旧約聖書学で、「詩編」の分析、キリスト教の先駆けとなったヘレニズム時代ユダヤ教諸教派の思想的特徴とその時代史、古代オリエント及びギリシアの諸宗教とユダヤ思想との関係を研究課題とされています。『旧約詩編の文献学的研究』（新教出版社）、『新版　総説旧約聖書』（日本基督教団出版局）などご著書も多く、日本基督教学会、日本旧約学会等で幅広く活躍されています。

（総務部長）

2018年度年間標語

おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。
（ローマ 15:2）

学院チャプレン　中野　敬一

紀元１世紀のローマの教会には、信仰の「強い者」と「弱い者」が存在したとあります。信仰の強弱は信仰歴や経験値の差を指すのではありません。教会のなかには、ある種の慣習を容易に捨て去ることができない「弱い者」がいたのです。強い者は、弱い者の考えに理解を示そうとはせず、両者には対立が生じました。

そのような状況下で、この言葉がパウロによって語られました。まず15章１節で「強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません」と諭し、強い者は弱い者を切り捨てるのではなく、その弱さを自分のものとして引き受けることを勧めています。「強い」からこそ「弱さ」を担うこと、つまり、自分の益に終始するのではなく、相手の益について考えることをパウロは主張します。この文脈において、自分の満足を求めるべきではなく（直訳：「自身を喜ばせないようにし」）、隣人を喜ばせるように、と展開していくのです。

パウロのこの言葉は、自己本位に生きる者への警告でもあります。ただし、自己の喜びを抑制して隣人を喜ばせることだけが要求されているのではなく、留意すべきは、「互いの向上」という言葉です。喜ばせる側と喜ぶ側の両者にとっての向上が重要となります。与える喜びを知った者には、隣人へのさらなる奉仕が期待され、与えられる喜びを知った者には、自らが隣人愛の担い手へと導かれていくことが期待されているのです。

また、「向上」の原語には「建てる」「家造りする」の意味もあります。互いに協力して作業を進めることで、やがて完成する建物の姿は、我々の目標のイメージです。今年度も「愛神愛隣」を実践していくために、この聖句を心に留めて、愛のわざの積み重ねを継続してゆきたいと願います。

＜追悼＞山内 祥史先生

飯　　謙

2017年４月３日、第11代学長の山内祥史先生が天に召されました。享年84歳でいらっしゃいました。ご家族に召天のことを公にしてはならないと言い遺されたため、訃報が学院関係者に届いたのは本年１月のことでした。一同、驚きと悲しみに言葉を失いましたが、このエピソードからは先生の恬淡かつ温かいお人柄を思い起こさせられました。

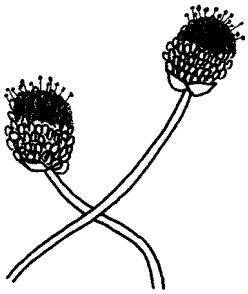
先生は1932年のお生まれ。関西学院大学大学院修了後、64年４月、本学院中高部に国語科教諭として着任。授業ではしばしば本題から外れて先生ご自身の来し方を話され、思春期を悩みつつ歩む生徒に寄り添い、よき感化を与えたと漏れ聞きます。

72年、近代日本文学の教員として大学に移り、太宰治研究の第一人者として、最晩年まで活躍されました。76年には総合文化学科立ち上げに参加。学務も精力的に引き受け、94年４月から定年を迎える98年３月まで学長を務められました。

先生の在任中もっとも記憶に残る出来事は、95年１月17日の阪神・淡路大震災です。先生はこの日、日本私立大学連盟の学長会議で東京に滞在中でしたが、空路帰任し、文字通り陣頭指揮にあたられました。神戸女学院大学が今日あるのは先生のご尽力によると申し上げても過言ではありません。

先生の数多いご貢献の中で特に強調したく思うのは、先生がこの緊急事態にあってまず神戸女学院の教育理念の明確化を第一の課題とされたことです。社会全体が「復興」を、経済的な問題や数合わせの議論へと安易にすり替え始めていた時期に、先生は踏むべき進路を示されたのでした。このことを山内先生からの大切なメッセージとして新たな思いで受け止めたく思います。遺された皆様の上に主のお慰めを、先生の上に主の平安をお祈り申し上げます。

（前学長・チャプレン）



クリスマス報告

〈大　学〉

平和を祈りつつクリスマスの時期をむかえました。

クリスマス礼拝当日となる12月22日の金曜日は、授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝を皆でまもりました。音楽学部による演奏・合唱奉仕の中での讃美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。今年は高槻日吉台教会の小笠原　純先生に「おさなごイエスさまと共に」と題してメッセージをいただきました。小笠原先生はクマのパディントンの人形を持って来られました。今年６月に亡くなられたマイケル・ボンドさんの物語の主人公です。マイケルさんはパディントンを難民に例えられ、難民ほど悲しいものはないと訴えています。同時に小笠原先生は、ヘロデ王から逃れるためにエジプトに逃げたイエスさまも難民だと語られました。愛と優しい心が大切だと語られた後、「クリスマスケーキの切り方を知っていますか？」と問われました。クリスマスケーキはその場にいる人数に一つ足して切り分けるそうです。それはイエスさまの為に、イエスさまの代わりに来られる小さき者の為です。分かち合いの心を大切にし、愛によって支えられている神戸女学院という学び舎でクリスマスケーキの切り方を教えていただいたことを皆が大切に心に刻んだ日となりました。

昨年に引き続き、会場のほのかな灯りの中、暗闇の中に灯る壇上の蝋燭の光に、キリストの生涯と福音を感じる大切なひと時となりました。

大学クリスマス礼拝

〈神戸女学院　公開クリスマス礼拝〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で45年目をむかえました。

学院オルガニストの片桐聖子氏による前奏が講堂に響き渡り始まりを告げました。続いて、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美。壇上の蝋燭の灯りだけがゆらめく中、音楽学部による演奏が会場を包みます。今年は中野敬一学院チャプレンから「神は我々と共におられる」と題してメッセージをいただきました。イエスさまは「インマヌエル」と呼ばれる方であると聖書に書かれています。インマヌエルとは、「神は我々と共におられる」という意味であり、寄り添って共に歩んでくださるということです。そのことを、イエスさまが生涯を通して示してくださっています。この言葉は、力強く宣言するのではなく、弱く小さな声で願うところに神さまが共にいてくださいます。そして、いつか暗闇に輝く蝋燭の灯のように必要となった時に明るさを増し、私たちを支えるための神様からの素敵なプレゼントであると語られました。苦しみ、悲しみ、困難の中にいるインマヌエルという言葉を必要としている人々に神様が共にいてくださるよう、共に祈りを捧げました。

再びオーケストラ、ハンドベルの演奏に心をゆだね、一同で高らかにクリスマスの讃美歌を歌い上げ、最後に祝祷をもってクリスマス礼拝は終わりました。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを強く伝えられる大きな機会であり、共にひとつの祈りのときを持つことができる大切な場です。次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、神戸女学院に連なる者として、一緒に過ごしていただけるよう祈るものです。

司式：大門　光歩　　奨励：中野　敬一
指揮・編曲：松浦　修
合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部
ハンドベル・中高部コーラス指揮：喜多　牧子
奏楽：片桐　聖子

（チャプレン室）

〈プレゼント・献金報告〉

★施設へのプレゼント

今年も大阪水上隣保館と神戸真生塾、福島にある社会福祉法人　牧人会白河めぐみ学園と白河こひつじ学園へプレゼントをお届けすることができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部による手作りの小物とS料理研究部が焼いた名前の入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。誰かがあなたの事を思い、支えたいと思いを寄せているその気持ちだけでも子どもたちに伝えることができるよう、これからも行っていきたいと思います。

福島には郵送いたしましたが、神戸真生塾には中高部自治会の方々、大阪水上隣保館には飯チャプレンが、サンタクロースの代表としてプレゼントを運んでくださいました。合わせて感謝と共に報告させていただきます。

皆様、ありがとうございました。

（チャプレン室）

〈中高部クリスマス燭火賛美礼拝報告〉

12月18日（月）、講堂にて中高部のクリスマス燭火賛美礼拝を守りました。

礼拝前、照明を落とした講堂の壁には救い主の降誕の場面が映し出され、パイプオルガンによる前奏曲の響きによって厳かであたたかな雰囲気がつくりだされていました。

招きの言葉から礼拝は始まりました。S2音楽選択者によるハンドベルの清らかな演奏に続いて、JSコーラス部生徒が讃美歌を歌いながら入堂してくると、講堂全体が聖堂にいるかのような雰囲気に包まれました。

聖書の朗読と賛美を交互に捧げながら、クリスマスの出来事を振り返り、その意味を確かめる時を守りました。

この日は神戸教会の菅根信彦牧師により「星をつないで」という題で説教をしていただきました。菅根牧師は、アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリの『星の王子様』の表紙に描かれた星の並びとクリスマス物語で語られる星について触れ、キリストの降誕が希望の光であることを教えてくださいました。生きてゆく上で、恐れや不安が尽きることはありませんが、夜空の星をつなぐようにして、希望の光を確かめながら歩むことの大切さを考える機会になりました。

礼拝の中で講堂の檀上にキリストを象徴するローソクと、信仰、希望、愛を象徴する3本のローソクに火が点され、私たちの心に灯された希望の光について考える時が与えられました。それぞれの心に灯された光をつないでゆくためにも、お互いのことを思いやり、お互いのために祈る者でありたいと感じました。賑やかに過ごす毎日の中で、私たちは小さな火を見過ごし、その火を吹き消そうとしているかのように振る舞っていることがあるのかもしれない…。そんな思いを抱く時となりました。司会者の祈りの中で、檀上に灯された火がキリストの教えられた信仰、希望、愛の象徴であることが触れられ、それぞれの心にもクリスマスの灯が灯されたことを感じました。その灯を隣人のために掲げて歩む者でありたいと思います。また、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」というクリスマスのメッセージにふさわしく応答する者でありたいと思います。

「いそぎきたれ」を繰り返し歌いながら退堂して礼拝は終わりましたが、それぞれの者が新しい希望と決意をもって講堂を出発する機会になったと感じています。

すばらしい礼拝のためにご奉仕くださいましたすべての皆様に心から感謝いたします。

（JS宗教部）

創立者タルカット先生の母校、Miss Porter's School から訪問団をお迎えして

2018年の年明け早々、学院は創立者で初代校長のタルカット先生の母校、Miss Porter's School（米国コネチカット州にある４年制の高等学校、以下 Porter's と表記）から、生徒15名、引率教員２名、Porter's の卒業生で日本での受入を担当している永瀬泰子氏ご夫妻をキャンパスにお迎えしました。

Porter's では毎年１月、２年生全員がグローバル研修プログラムで世界各国へと旅立ちます。数ある訪問先の中でも日本は一番人気とのこと。東京でホームステイをしながら永瀬氏の母校、吉祥女子中学・高等学校が提供するプログラムに参加する３週間。

期間中に小旅行が計画されており、今回は Porter's 創立175周年の記念日にあたる11日から１泊２日で、大先輩タルカット先生が日本で創設した学校、神戸女学院を訪問してくださいました。院長室でタルカット先生の肖像画と対面し、図書館でタルカット先生が日本へ来られた時代や、先生の遺された書籍などについて学び、茶道の講義に参加して袱紗さばきにも挑戦。続いてめじラウンジで開催した歓迎会では、この記念すべき日に学院をお訪ねくださったことへの感謝をこめて用意したお祝いのプレートを載せたケーキに歓声があがりました。

ケンウッド館に宿泊した一行は、翌朝翻訳クラスの学生さんたちの案内でキャンパスツアーを楽しんだあと、ソールチャペルで新年礼拝に参加。一行のための同時通訳は大学院生たちが担当しました。引き続いて社交館集会室で昼食会、再会を約してマイクロバスに乗りこむ一行を見送りました。おかげさまで、生徒さんたちに神戸女学院滞在を楽しんでいただけたようで、先方も今後のパートナーシップ構築を希望してくださっています。教職員学生のみなさまのご協力に厚く御礼を申し上げます。

（院長室課長）

図書館でタルカット先生について学ぶ

国際交流センター主催のお茶の講義に本学への留学生と一緒に参加

歓迎会で Miss Porter's School の創立175周年を祝う

英語版キャンパスツアーはシェイクスピア・ガーデンから出発

同時通訳つきの新年礼拝に出席

史料室の窓（45）

神戸女学院不変の教育理念

― 神戸女学院大学発足70年に寄せて ―

神戸女学院史料室　佐伯　裕加恵

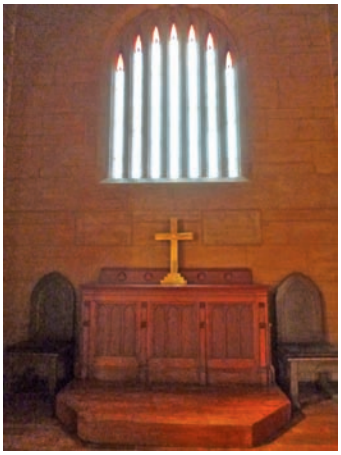
今年2018年、神戸女学院大学は発足70年を迎えます。新制大学一斉発足は1949年でしたが、1948年に先陣を切った大学が12校ありました。公立はわずか１校（神戸商科大学、現・兵庫県立大学）で、残る11校（上智大学、國學院大學、同志社大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学、聖心女子大学、神戸女学院大学）は全て私立大学でした。関西では５校、そのうち唯一女子大学であったのが神戸女学院（女子大学５校のうちの１校）でした。大学の顔ぶれを見てみると、全体の半数がキリスト教系の学校だったことがわかります。つまり、日本では教育に占めるキリスト教主義学校の伝統が明治以来連綿と続いていて、戦後いち早く高等教育機関として認可を受けられる水準の教育が維持されていたということなのでしょう。

神戸女学院にとって大学の設置は1885年以来の夢でした。高等教育を指向した時点（1879年ごろ）から言えば、実に70年来の夢ということになります。戦前は女子大学が制度上認められていませんでしたが、歴代の宣教師たちは、大学とは名乗れずとも、その名に値する内容を辛抱強く着実に作り上げ、設備を整え（岡田山キャンパス移転はその布石でもありました）、ついにその時を迎えたのです。

初めは、文学科（英文学、国文学、歴史学の３専攻）と家政学科（食物学、児童学、社会学の３専攻）の２学科を置くつもりでしたが、文部省との交渉によって最終的には文学部（英文学科、社会学科、家政学科）のみの単科大学になりました。これが神戸女学院大学の最初の姿です（のちに音楽学部、家政学部の独立、人間科学部改組があり、現在の３学部体制になっています）。

大学に限らず、学校は教育についての「目的と使命」を持っていなければなりません。神戸女学院の教育の目的と使命とは何でしょうか。大学設置申請書には「本学は基督教の教に基いて教育を施し、女子をして広く知識を究め深く専門の学芸を修めまた高く人格を磨かしむることを以て目的とする。而してこの目的の達成を期すると共に本学に学ぶものをして神戸女学院の伝統である国際精神と基督教信仰とを体得実践するものたらしめ、知的にも道徳的にも、文化社会の生成発展に寄与する人物を育成して、平和世界の確立発展に貢献することを以て使命とする。」と書かれていました。

歴史を繙いてみると、現存する最古の学校規則（1887年）には “Parents therefore who wish to give their children a liberal and thorough education are respectfully invited to examine this circular.” とあります。“a liberal and thorough education”（リベラルで完璧な教育）―これが神戸女学院の教育理念の根幹です。その後、教育勅語、文部省訓令第12号が出され、教育に国家の影が色濃くなり、日本語では「基督教の道徳に基き女子に須要なる教育を施し以て教育勅語の趣旨に適ひたる淑良有用なる婦徳を養成するを以て目的とす」（1909年）と書き換えられていますが、英語では “Its purpose is, by means of a Christian education, to train girls and young women into a harmonious development of body, mind, and spirit, and thus to equip them for lives of useful service to God and to their fellowmen.” と記し、“a harmonious development of body, mind, and spirit”（校章に象徴される精神）と “useful service to God and to their fellowmen”（奉仕の精神）を高らかに謳っています。戦争が激しくなるとキリスト教についての記述は後退を余儀なくされ、「国家に有用な女子を育成し、その目的達成のためにキリスト教の精神を採って徳育に資す」という表現になりますが、それでも、キリスト教という文言が消えることはありませんでした。



神戸女学院は祈りと共に

新制大学発足70年、夢の実現から140年、神戸女学院はずっと変わらず同じ目的と使命を持ち続けています。

＜キャンパスお気に入りの場所＞

運　命

私と神戸女学院を結び付けてくれた「中庭」が、私のお気に入りの場所であり、運命の場所です。

高校３年生の夏、進路を決めかねていた私はいろいろな大学の資料を集め、キャンパスを巡っていました。けれども、どの大学もキャンパスにいる自分が想像できず、迷いの日々が続いていました。そんなある日、神戸女学院大学のオープンキャンパスのお知らせを目にしました。偶然にもちょうど開催日でしたので、そのまま導かれるように岡田山を登り、中庭に辿り着きました。噴水の水が流れる音、小鳥のさえずり、美しい夕暮れの空にゆっくりと流れる雲、そして厳かにたたずむ学び舎。つい先ほどまで自分が生活していた世界と同じ時をもっているとは思えない不思議な感覚を覚えました。はじめて訪れたはずなのに懐かしい。この場所は私を受け入れてくれている。そう感じると同時に、私の心の迷いは消え、はっきりと思ったのです。「私はここに居たい。」その後、学生としてだけではなく職員として今でも神戸女学院に携わることができているのは、あの瞬間があったからだと思うと、私にとって中庭は運命の場所なのです。

バザーの日には、子どもたちが走り回り笑顔があふれる中庭。授業時間には、白衣姿の学生が調査を行っている中庭。晴れた日には、木々のお手入れをしてもらっている中庭。今日もまた中庭の一日がはじまります。

（学長室）

中庭

岡田山の緑に囲まれた心理相談室

心理相談室は人間科学研究科の附属施設で、西門をあがってすぐの理学館別館という建物の中にあります。大学院生の教育訓練及び研究機関を兼ねているため、教員の指導のもと、基本的には大学院生が子どもから大人の方までのさまざまなこころの悩みや心理的問題について相談をお受けしています。相談内容によっては、必要に応じて医療機関との連携や、より適切と思われる機関への紹介も行っており、相談内容について秘密は固く守られています。

心理相談室内には、来談される方に応じてさまざまな面接室やプレイルームを用意しています。カウンセリングを行う面接室の中でも、特に「大面接室」から見える景色が岡田山の豊かな自然と安らぎが感じられ、来談された方にも落ち着いた雰囲気で相談していただけるのではないかと思っています。

また心理相談室では、毎年７月末～８月はじめ頃にかけての１週間、「心理相談室ウィーク」と題して、本学大学院教員による講演会と相談室スタッフによる無料相談を開催しており、毎年多くの方にご参加いただいております。講演会の後には心理相談室の見学ツアーも行っており、心理相談室のプレイルームや面接室、箱庭などを直接ご覧いただくことができます。時間がありましたら一度ご参加いただき、私のお気に入りの景色を味わっていただけたらと思います。

（心理相談室）

心理相談室　大面接室

大学報告

女子学生のためのキャリアフォーラム実行委員を終えて

文学部 英文学科　３年生

「就活って、何から始めたら良いのだろう。」６月初旬、私は漠然とした不安を抱えていました。まずは何か行動を起こそうと思い、『女子学生のためのキャリアフォーラム実行委員』インターンシップへの参加を希望いたしました。今回のフォーラムは、兵庫県内の企業の紹介、就活に関する情報を質疑応答形式で聞くことができるパネルディスカッション、人事の方と直接お話ができるグループトークがメイントピックでした。そのイベントを企画するのが、このインターンシップの主な内容です。そこで私は実行委員のリーダーを任されることになりました。リーダーの役割として、円滑な運営の為にはマネジメント力が必要とされ、また他の学生たちとの連携や自主性・臨機応変さが求められるインターンシップでした。最終的には参加者数も予想を上回り、フォーラムを無事に終えることができました。

初対面の学生や企業の方々の前でお話しすることは簡単なことではありませんでしたが、一言一句に思考を巡らせながら発話する練習としてはこの上ないものでした。また今回の経験すべてを通して、リーダーシップやメンバーシップを遂行することやマネジメント力がどのような仕事をする上においても大切であると学ぶことができました。今後、就職活動が本格的に始まる中で、自分の役割を果たすように努力すれば、道は拓けるのだと感じることができました。

貴重な経験をさせていただき有難うございました。

ご指導いただいたご担当の方や企業の方、共に活動し私を支えてくれたメンバーに深く感謝しております。

実行委員リーダーとしての挨拶

この成功体験から得たもの

人間科学部 心理・行動科学科　３年生

先日、「にしのみや学生ビジネスアイデアコンテスト」において、西宮商工会議所会頭賞（２位に相当）をいただきました。西宮市の魅力を再発見できる商品やサービスを提案するコンテストで、私は「名塩和紙でつくる母子手帳のブックカバー」を提案しました。

今回の経験から得たものを２つ紹介します。一つ目は、自信です。私の活動に対し賞金３万円に値する評価をいただけたことはもちろん、私の話に興味を持って耳を傾けてくれる人がいることに気づき、自分の感性や感覚に自信を持つようになりました。今までは曖昧であった「成功」を目に見える形で残すことができ、これからの大きな糧になると感じています。二つ目は、人との繋がりです。コンテストには一人で参加しましたが、最終審査の直前まで沢山の方とお話する機会を作りました。実際に製紙所に足を運び、名塩和紙の魅力や特性を教えていただけたことで、提案する商品をより好きになりました。また、会社を経営されている方や大学のゼミの友人など、幅広い視点からアイデアや商品の魅せ方に対するアドバイスをいただけたことが今回の賞に結びついたと考えています。その中で、疎遠になっていた人と連絡が取れたり新しい貴重な出会いもあり、何にも変えがたい喜びを感じることができました。人に温かさを感じてもらえる商品を考えようと取り組んだ結果、自分自身も温かさを感じる経験となり、大学生活の思い出の一つとなりました。

表彰式の様子

「KOBEにさんがろくプロジェクト」で特別賞をいただきました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科　3年生

「KOBE にさんがろくプロジェクト」とは神戸産農水産物の魅力を広めるためのアイデアを提案し、企業・農業者の方々との連携により商品化を目指すといった神戸市が主催するプロジェクトです。今年の課題は「インバウンド」。環境・バイオサイエンス学科有志４人で参加しました。神戸といえば“パン”と考え、神戸の食材を使いメロンパンをバーガーに見立てたものを作ることに決めました。生地に北神みそを加えて香ばしさを出したメロンパンをイスズベーカリー様に作っていただき、六甲バター様のクリームチーズに味噌と絡めたクルミ、神戸産の小豆を使った手作りあんこをはさみました。この商品を作るまで何度も話し合い、時には意見の違いで言い争うこともありましたが、企業の方々に有意義なアドバイスをいただき、何十回も試作を重ねました。また、学内の留学生や外国人講師の方にも試食と調査を行い、外国人に好まれる商品を約５か月かけて完成させました。発表当日はみんなの気持ちを込めたプレゼンを行い、商品のおいしさはもちろん、商品アピールの意気込みに対し、審査員から高い評価をいただき「特別賞」を手にすることができました。

今回このプロジェクトで一からものをつくる難しさや、協力する喜び、評価される感動や達成感など様々なことを経験することができました。今回協力していただいたすべての方に感謝し、この経験を今後の人生に生かしていきたいと考えています。

にさんがろくプロジェクト提案会にて
（筆者は右端）

2017年度音楽学部冬期講習会

音楽学部冬期講習会は昨年度からはじまった催しです。長年開催している夏期講習会と同様、本学の音楽教育について高校生や中学生に理解していただくのが目的です。開講プログラムは舞踊を除く各専攻を対象とする聴音授業・模擬テスト、個人レッスンそして進学相談会で、さらに今年度は12月10日の大学オープンキャンパスと日程を合わせ、受講生の方々は講堂クリスマス礼拝にも参列し、本学教育をより深く理解していただく一日になるよう企画しました。

昨年度37名であった申込者は、本年度は57名に増加しました。受講生たちは朝の清澄な空気のなかパイプオルガンの響く講堂に集まり、チャプレンのお言葉に導かれ神に祈り、その心持ちのまま音楽館に移動し授業・レッスンに臨みました。

本学教育の紹介に重点を置く夏期講習会と比較し、冬期講習会は年明け入試も目前に控えたより実践的意味合いある内容です。受講生の眼差しもそれを意識された真剣なものであり、進学相談会では入学後の学生生活に及ぶ具体的な相談も多く、冬期らしい充実した講習会となりました。

次年度以降も継続していきたい催しと考える次第です。

（音楽学部長　石黒 晶）

聴音授業の様子

大学ホームページを全面リニューアル

昨年11月29日（水）に大学ホームページ（広報管轄分）の全面リニューアルを行いました。

今回のリニューアルでは、トップページに本学での学びを表す動画を配置し、現在のトレンドに合わせてインパクトのあるイメージにする一方で、全ページに亘ってスクールカラーを強調した配色とし、伝統も取り入れていることがデザイン上の特徴です。また、ページ構成を大幅に見直し、これまで重複していた情報を統合するなど、本学の基本情報を公開するページとしての機能も強化しました。そして、これまで実現できていなかったスマートフォン対応を行い、スマートフォンでもより快適に閲覧できるようになったことも大きなポイントです。

またリニューアルにおける大きなトピックとしては、新たなコンテンツ「Stories」を制作したことが挙げられます。これは卒業生に在学時の思い出や現在について語っていただくことで、本学での学びや学生生活をストーリーとして社会の人々により具体的にイメージしてもらうためのものです。まず第一弾として、12名の卒業生に登場していただきました。12名それぞれに本学での思い出や、社会に出たからこそわかる本学の魅力を語っていただき、12本の素晴らしいストーリーにまとまりました。今後も随時、ストーリーは増やしていく予定です。

今後は Facebook 等の SNS と合わせて、ホームページによる情報発信を更に増やし、広報戦略の重要なツールに育てていく予定です。

（学長室）

新しいトップページ
（ロゴマークの背景は動画）

第８回絵本翻訳コンクール表彰式

第８回神戸女学院大学絵本翻訳コンクールには46都道府県・311校から1839点の応募が寄せられた。課題絵本は、スウェーデンの人気作家、ウルウ・スタルクの手による『When Dad Showed Me the Universe』。息白む日暮れ前「パパ」が「ぼく」を長い散歩に連れ出す。辿り着いたのは灯りひとつない街外れの小高い丘。頭上に瞬く久遠の光を指でなぞりつつ父は星座の名前を一つ、また一つと息子に教える。ところが息子の心を奪ったのは足元の草叢にさざめく命。大人が誰も気にも留めないような地味で小さな生き物が、ただそこに在る。そんな取るに足らない日常の光景に息子は小宇宙の煌めきを見出すのだった。父子の視差を描写しつつ［教えること］と［学びに寄り添うこと］の違いを浮き彫りにした本作は、作者スタルクの自伝的物語だ。

厳正な審査を経て選出された入賞者（最優秀賞該当なし、優秀賞２作品２名、佳作３作品５名、審査員特別賞５作品５名、計12名の高校１・２年生）ならびに引率者を招いて、去る2017年11月25日、社交館 KCC ルームにて表彰式が開催された。

本学出身のベストセラー絵本作家、真珠まりこ審査員長による総評で幕を開け、審査員による作品解説、優秀賞受賞者による作品朗読、佳作・審査員特別賞受賞者による挨拶、そして茶話会へと催しはとり運ばれた。

各自に宛てられた添削コメントを読みながら自作品を振り返った受賞者が、日本語力を磨くことの大切さを痛感したと口を揃えつつ見せた表情はみな凛として、眉には力が漲っていた。

（英文学科准教授　中村 昌弘）

今年度の受賞者と審査員（表彰式にて）

2017年度音楽学部定期演奏会報告

秋の深まりを感じる11月21日、兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホールで、音楽学部の定期演奏会が開催されました。コンサートには800名余のお客様がお越しくださり、卒業生や元教職員の方々を始め、数多くの高校生にもご来聴いただきました。音楽学部の一年に一度の大きなイヴェントである定期演奏会が、今年も華やかに開催されましたことを感謝と共にご報告させていただきます。

プログラム第１部は女声合唱の作品で、最初に音楽学部１、２年生による高田三郎作曲「心の四季」より〈風が〉〈雪の日に〉の２曲が山口英樹先生（本学非常勤講師）の指揮、齋藤遙佳さん（伴奏要員）のピアノ伴奏で演奏されました。引き続き３、４年生による千原英喜作曲の女声合唱組曲「明日へ続く道」より〈もう一度〉〈悲しみの意味〉〈明日へ続く道〉の３曲、そして１年生から４年生までの合同で、松下耕作曲、女声合唱とピアノのための「３つの詩編」より〈主は私の羊飼い〉が湯川美佳さん（伴奏要員）のピアノ伴奏で演奏されました。山口英樹先生には、毎週熱心なご指導をいただき、学生たちの歌声が調和した温もりのある響きとなって会場を満たしました。

第２部は、オーディションで選ばれた大学院生をソリストとして、松浦修先生（本学専任講師）の指揮、音楽学部オーケストラでチャイコフスキーのピアノ協奏曲第１番が演奏されました。ピアノ協奏曲の中でも特に人気の高いこの作品は演奏時間40分の大曲ですが、チャイコフスキー独特の甘美なメロディーと華麗なピアニズムが美しく発揮され、会場は大きな拍手で包まれました。

プログラム第３部では、ストラヴィンスキーのバレエ組曲「火の鳥」1919年版が、総勢65名のオーケストラ、松浦修先生の指揮で演奏されました。オーケストラメンバーには本学のマイナープログラムを履修している環境・バイオサイエンス学科の学生も加わり、音楽学部の学生と共に大きな舞台に立つ素晴らしい経験となりました。色彩豊かなオーケストレーションが魅力のこの作品は、複雑な音の重なり合いや動きの速いパッセージが多く、個々の演奏者に高い技術が求められます。「練習を重ねるごとに全体像が掴めるようになり、最初は苦痛に思っていた学生たちが音色の面白さや演奏の楽しさを発見していった」と松浦先生は話されていました。指揮者とオーケストラメンバーの熱意が溶け合って音楽は生き生きと展開し、第７曲「終曲」では陶酔の世界に導かれていきました。アンコールには、カヴァレリア・ルスティカーナの「間奏曲」が演奏され、美しい余韻を残して2017年度の定期演奏会が終了しました。

来年度は第九の演奏会を予定しております。次回も素晴らしい舞台をお届けできますよう、音楽学部一同力を合わせてまいりたいと思います。最後になりましたが、定期演奏会にご尽力くださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

（音楽学科長　佐々 由佳里）

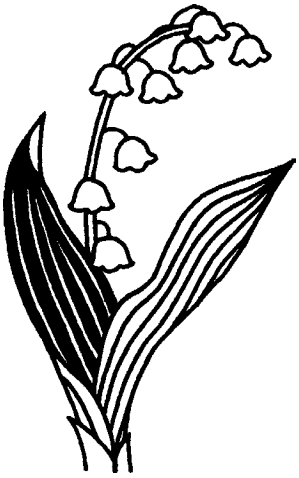
音楽学部定期演奏会

第９回舞踊専攻卒業公演

去る12月14日から16日に、本学エミリーブラウン館の舞踊専攻Ａスタジオにて、第９回音楽学部音楽学科舞踊専攻卒業公演が行われました。公演一作品目は、専任教授、島﨑が第２期生に振り付けをしたAbsence of story の再演で幕を開けました。男性ゲストダンサーの助けもあり、新たな作品として蘇ったと思います。その後は休憩を挟んで、非常勤講師の鞍掛先生振り付けによる、BABEL という作品と客員教授の針山愛美先生による、Somewhere in the red circle という作品がそれぞれ上演されました。BABEL は３名の学生たちが椅子を使って踊るとても激しい振付作品でした。一方で Somewhere in the red circle はクラッシックバレエのテクニックを使い４名の学生たちがエレガントに舞う作品でした。そして２回目の休憩を挟んで、最後にもう一度島﨑振り付けによる、Current of wonder で幕を閉じました。この作品では、フィリップグラスがアマゾンの原住民とコラボレートし創った音楽が使用され、Current、つまり流れと、その周辺に作者が見たフラグメントな情景が表現されました。技術的にも体力的にも多くを要求される作品でしたが、７名全員が最後まで諦めることなく、研修生と共に作品の質を日々高めていくことを実践できたのは、３月の定期公演に向かって大きな収穫であったと同時に、下級生にとってもこれからそれぞれが経験していくであろうクリエイションの過程にて何が求められるのかを垣間見る機会になったことでしょう。

（音楽学部教授　島﨑 徹）

作品名：Absence of story



2018年度大学入試結果中間報告（2/20現在）

2018年２月20日現在において、AO および指定校制推薦、KCH 推薦、公募制推薦、クローバー推薦、帰国子女の各入試を昨年の内に、また、年が明けてからは一般前期ＡＢＣＤ日程および大学入試センター試験を利用する入試（センター利用）前期日程が済み、残すは一般後期日程およびセンター利用後期日程のみとなっている。

2018年度入試において、本学は２点の新しい施策を実施した。１点目は文学部英文学科での英語資格試験利用型入試の導入であるが、これにより英語資格試験のスコアを利用することで本学独自の英語の代わりに、みなし得点として利用することが可能になった。この英語の外部検定試験については2020年度入試からは、大学入試センター試験に代わる大学入学共通テスト（仮称）においてもその導入が決まっている。２点目は、一般入試およびセンター利用入試におけるインターネット出願の導入である。多くの大学では既に一般化しているもので、この導入により本学も受験生へのサービスが向上できたと考えている。

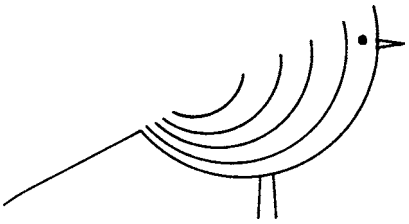
さて、2018年度入試の現時点での概況であるが、入試方式や学科によって多少のばらつきはあるものの概ね志願者増の傾向が続き、好調である。

まず、AO 入試においては今年度新たに英文学科での募集を開始し、それにより志願者総数が増加した。また指定校制推薦、公募制推薦についても、過去３年間で最多の志願者を得ることができた。傾向としては文学部が増え、人間科学部は若干の減少となった。一般入試前期ＡＢ日程においても、志願者総数が昨年度を上回ったが、特に文学部総合文化学科と人間科学部心理・行動科学科でその傾向が顕著に見られた。一方、大学入試センター試験の成績を利用するＤ日程では、ほぼ全ての学科で志願者数を減らすこととなった。ただし、ＡＢＣＤ日程を通じて志願者実人数は昨年度を上回っており、本学としては良い状況と捉えている。

志願者増の要因としては、ひとつは好調な景気動向を受けての受験生の文高理低志向が挙げられる。加えて大規模大学の定員管理の厳格化が大きく影響しており、合格者数を絞る大学が増えていることが挙げられる。このことが、受験生心理に影響を与え、出願大学の見直し等において、これまでとは異なる受験生の動きが出てきていると考えられる。いずれにしても、これらは外部的な要因であり、社会環境に伴って簡単に変化すると言える。

そのため、外部要因に影響を受けることなく、本学の教育内容や魅力を訴求することで受験生を獲得できる力をつけることが急務であると考えている。入学センターとしても一層の努力を続けていくつもりであるが、引き続き、関係者の皆様のご協力を心よりお願い申し上げる。

（入学センター課長）



＜派遣留学報告＞

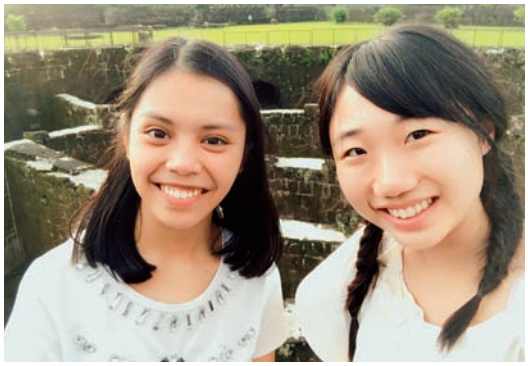
ミリアム大学

フィリピンで学んだこと

人間科学部 心理・行動科学科　4年生

私は日本以外の文化に触れ現地で暮らす人たちの考えや生き方についてもっと学びたいという強い思いがありフィリピン留学に挑戦しました。様々なイメージを抱きながらいざフィリピンへ行くとそこは私が想像していたものとは全く違う世界が広がっていました。実際にフィリピンへ行くと、多くの高層ビルが立ち並ぶ地域が多くあり想像以上に道は整備されていました。日本のメディアが取り上げる発展途上の段階の地域もありましたが、発展している部分もたくさんありました。そして驚いたことは女性が社会でとても活躍しており、日本よりもはるかに男女平等が進んでいました。その一方で「貧富の差」という問題も肌で感じられました。ストリートチルドレンの子が道端で生活しており、物売りの少年少女がいる一方で、学校に通い、車で送り迎えしてもらっている子どもがいるということ、そしてミリアム大学の先生と話した「フィリピンには教育を受けられない子どもが多くいる。教育が受けられないから永遠に貧富の差が埋まらない」という言葉に衝撃を受け、貧富の差について改めて考えさせられました。しかし現地の学生は貧富の差を埋めるにはどうするべきか考え、解決に向けて動いているように思いました。また、学生はみんなとても勤勉で、どんなことに対しても真摯に取り組み、自分の考えを発言し、将来の目標に向かって積極的に物事に取り組んでいました。そしてその姿に私は感心させられたことはもちろんいつも刺激を受けていました。私がこの留学での目標にしていた現地の文化に触れ現地で暮らす人たちの考えや生き方に学ぶということが達成できたと思います。

最後に、神戸女学院大学国際交流センターの皆様には大変ご尽力いただき心より感謝申し上げます。



友人とマニラにて

アサンプション大学

沢山の素敵な出会い

文学部 英文学科　2年生

“あなたは異文化の架け橋になることができる人よ”

無事約半年間の留学を終え、お世話になった先生から言っていただいた一言でした。その時、フィリピン、アサンプション大学に留学して本当に良かった、今回学んだこと、経験、出会いは一生の宝になったと思いました。

正直、日本を発つ前は人も場所も全く知らない国で一人やっていけるのかと不安はありましたが、フレンドリーな人々に温かく迎えられ、助けられ、私もすぐに馴染むことができました。

大学のあるマカティは想像以上に都市化されていましたが、巨大なショッピングモール、高層ビルが立ち並ぶ中、道一本超えた所にスラム街が隣接しているのです。その光景を目の当たりにし、貧富の格差がどれだけ深刻かを感じさせられました。格差がある中で大学に通うことができるのはとても恵まれたことで、友人たちの勉強や将来に対する熱意は、私が授業の課題や勉強に四苦八苦していた時、何度もモチベーションを上げてくれました。また大学では授業だけでなくThe Assumption Dance Company Jazzの一員として様々なイベントに参加し活躍、交流の場を広げることができました。

異文化の中で生活するということはなかなか簡単なことだけではありませんでしたが、相手の文化との差異をどう理解し受け入れればいいかを学ぶことができました。また、日本について興味を持つ子が多く、日本の文化を伝えるなかで、改めて日本人として何を大切にすればいいのかを考え直すことができました。

今回留学に携わってくださった全ての方々の支えがあったからこそ、楽しく充実した日々となりました。この感謝の気持ちを忘れず、留学中より強くなった夢を叶えるためにも日々精進いたします。有難うございました。

イントラムロスにて

徳成女子大学

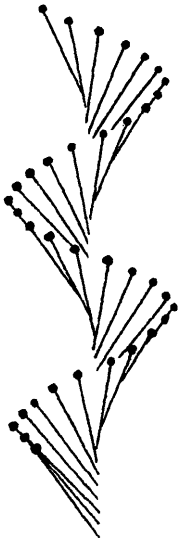
留学生活で学んだこと

人間科学部 心理・行動科学科　３年生

私は昨年の８月から12月まで、韓国のソウルにある徳成女子大学に留学していました。留学先では月曜日～金曜日まで、午前は語学学校に通い、午後は大学で授業を受講していました。語学学校のクラスメイトは12人がベトナム人、１人が中国人、そして私で、韓国以外の国の友人とも、韓国語で話すのがとても不思議で、楽しかったです。大学の授業では韓国人の友人と仲良くなり、遊びに行ったり、韓国語を教えてもらったりしました。休みの日には買い物に行ったり、観光をしたりし、また長期の休みには国内旅行にも行きました。自分の韓国語の未熟さに腹が立ち、苦しかったこともありましたが、日本にいる家族や友人、韓国で出会った友人が支えてくれたので、楽しく、充実した日々を過ごすことができました。そんな生活の中で、もちろん韓国語の実力は伸びていきましたが、それ以上に私は、精神面や考え方などが成長したと感じました。色んな国の友人と知り合い、話すことで、今まで私が普通だと思っていたことは、日本にとっての、また私にとっての普通であったことに気付き、自分を客観視し見つめなおすことで、自分の長所、短所を改めて理解することができたと思います。またいろんな境遇の方とお話しすることで、より広い視野で物事を見られるようになりました。元々は自分に自信が持てない性格でしたが、この留学のおかげで今の自分を認め、長所は伸ばして、短所は少しずつでも改善していこうと思えるようになりました。

このような成長できる機会を与えてくださり、いつもそばで支えてくださった神戸女学院大学の皆様、そして家族、友人に感謝の気持ちでいっぱいです。これからもこの留学で学んだことを生かして、頑張っていきたいと思います。

授業で親しくなった友人と



〈神戸女学院大学の企画による2018年度夏期語学研修参加者募集〉

2018年度の夏期語学研修は、次の４プログラムを実施予定です。詳細は４月作成予定の募集要項をご参照ください。また募集説明会を実施する予定です。日程は、決定次第、国際交流センター掲示板で告知します。春期（2019年２月～３月）にも語学研修を予定しています。詳細は国際交流センター（デフォレスト館１階）まで。TEL：0798-51-8579　Email：kokusai@mail.kobe-c.ac.jp

第９回　西オーストラリア大学（豪州）

時期：2018年８月～９月　　募集人数：20人　　参加費用：約55万円

西オーストラリア州のパースにある自然豊かなキャンパスで、約４週間、総合的に英語を学ぶ。ホームステイ。平日朝夕、食事付き。

第10回　カリフォルニア大学アーバイン校（米国）

時期：2018年８月　　募集人数：20人　　参加費用：約70万円

他国の留学生と共に約４週間、基礎および応用英語を学ぶ。英語力によっては、ビジネス英語クラスを受講することも可能。ホームステイ。平日朝夕食事付き。

第７回　ヨーク大学（カナダ）

時期：2018年８月　　募集人数：20人　　参加費用：約60万円

多文化都市トロントにあるカナダで３番目の規模を誇るヨーク大学にて、約４週間の英語研修を受講する。現地学生との交流や学外活動も含む。大学寮。

第10回　フランシュ・コンテ大学（仏国）

時期：2018年８月　　募集人数：12人　　参加費用：約60万円

パリから電車で約２時間半のブザンソンで、フランス語を約４週間集中的に学び、生きたフランス語を吸収する。隔年実施の研修。

※プログラムが追加される可能性があります。

研究所活動報告

◇講演会

・前期：2017年６月23日
“Picture Books In Translation: A Step Toward Strengthening Intercultural Understanding”
「翻訳絵本　異文化理解のための一歩」
（英語講演）
Susan E. Jones 英文学科専任講師

・後期：2017年11月17日
「戦後世界とジャズ外交」
京都大学大学院人間・環境学研究科
齋藤 嘉臣 准教授

◇研究所総会　研究発表

・前期：2017年６月30日
〈演奏会〉
岡田　将　　音楽学部准教授　（ピアノ）
Xavier LUCK 音楽学部専任講師（フルート）
Walter AUER ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
首席フルート奏者
音楽学部特別招聘教授
J. S. Bach: Trio Sonata in G-Dur, BWV 103
J. Andersen: Concert Piece for Flute & Piano, Op. 3
E. Köhler: Valse de Fleurs duo for 2 Flutes & Piano
F. Doppler: Andante and Rondo for 2 Flutes & Piano, Op. 25

・後期：2017年12月１日
「種々のマイクロスケール実験の教材開発と授業実践
―科研費による14年間の継続した取り組み―」
中川 徹夫 環境・バイオサイエンス学科教授

私は2009年４月に本学に着任以来、今日に至るまで、マイクロスケール実験（実験規模を縮小させた実験）の教材開発と改良に取り組んできた。マイクロスケール実験には、試薬の少量化、経費の節減、実験廃棄物の削減、実験時間の短縮など、さまざまな長所がある。小学校から中学校、高等学校、大学と、幅広い校種で活用できる。環太平洋国際化学会議（International Chemical Congress of Pacific Basin Societies, PACIFICHEM）、化学教育国際会議（International Conference on Chemistry Education, ICCE）、アジア化学教育者ネットワーク（Network for Inter-Asian Chemical Educator, NICE）等の国際会議でも、マイクロスケール実験関係の研究発表が数多く行われている。

私がマイクロスケール実験の研究に着手したのは、群馬大学教育学部に勤務していた2000年頃である。この頃から、個人研究費が少しずつ減額され、研究活動に陰りが見え始めた。そのとき、幸運にも東北大学の荻野和子教授（現在名誉教授）のマイクロスケール実験の講演を拝聴する機会を得た。少ない経費で、手軽に教材を作成できるという朗報であった。

当時荻野先生は、仙台市内の高校理科教員とともに、高校化学のマイクロスケール実験の教材開発に取り組んでおられた。私は勤務校が小学校・中学校教員養成課程であったので、小学校・中学校理科のマイクロスケール実験の教材開発に着手した。

安価なマイクロスケール実験にせよ、試薬・実験器具の購入のための経費は不可欠である。そこで、日本学術振興会の科研費（基盤研究Ｃ）を申請した。残念ながら当該年度は不採択で、翌年度も翌々年度も、３年連続して不採択の通知を受けた。

2004年度、申請４年目にしてようやく採択の通知を受けた。友人のアドバイスに従い、信じ難い話ではあるが、2003年度の申請書類を少し手直ししただけで採択された。その後、研究場所は電気通信大学を経て本学に移った。幸運にも、継続して科研費に採択され、14年間マイクロスケール実験の研究に従事できた。この間に取り組んだ研究課題および研究年度を、以下に記す。

・理科を専門としない教員のための水溶液に関する指導資料の開発（2004-2005年度、基盤研究Ｃ）
・小学校・中学校理科におけるマイクロスケール実験教材の開発（2006-2007年度、基盤研究Ｃ）
・理科に対する学習意欲を向上させるマイクロスケール実験教材の開発と改良（2008-2011年度、基盤研究Ｃ）
・持続可能な開発のための教育を推進させるマイクロスケール実験教材の開発と改良（2012-2016年度、基盤研究Ｃ）
・生徒主体型学習に有用なマイクロスケール実験教材の開発と改良（2017-2022年度、基盤研究Ｃ、現在研究中のテーマ）

いずれの場合も、研究成果を日本化学会、日本理科教育学会、日本教材学会、日本物理教育学会等の学会や、PACIFICHEM（ホノルル 2005、2010、2015年）、ICCE（ソウル 2006年、タイペイ 2010年、

ローマ 2012年、トロント 2014年)、NICE（東京 2015年、ソウル 2017年）等の国際会議で発表した。

研究成果の一部を、学会や国際会議で発表した後に考察を深め、学術論文として公刊した。代表的なものに、アルコールと水の混合に伴う体積減少に関するマイクロスケール実験教材[1)]と、マイクロスケール電池[2)]がある。紙面の都合で、詳細は割愛する。文献を参照いただければ幸甚である。

文献

1）Tetsuo Nakagawa, “Microscale Experiment on Decreases in Volume When Forming Binary Liquid Mixtures: Four Alkanol Aqueous Solutions,” Chemistry Education and Sustainability in the Global Age, Mei-Hung Chiu, Hsiao-Lin Tuan, Hsin-Kai Wu, Jing-Wen Lin, and Chin-Cheng Chou (Editors), Springer, Dordrecht, pp. 335–346, 2013.

2）中川徹夫,「マイクロスケール実験による電池教材の開発・改良と授業実践」, 教材学研究, 第26巻, 69–76頁, 2015年.

◇専門部会研究発表会

1．総合文化学科　2017年７月３日
「『違背実験』の笑い：ユーモアの倫理あるいは社会学的 nanchattebility」
清水　学 教授

2．環境・バイオサイエンス学科　2017年７月11日
「人はなぜ老いるのか、そして若返ることはできるのか」
塩見 尚史 教授

3．英文学科　2017年７月27日
“The Role of Intercultural Competence in the Interpreting Classroom”
奥村 キャサリン 准教授

4．総合文化学科　2017年11月21日
「画家の同定：『セントルイスの聖母の画家』と15世紀後半のフィレンツェ絵画」
伊藤 拓真 准教授

5．心理・行動科学科　2017年12月４日
「イメージが導く記憶
―ホログラフィートークによるトラウマケア―」
國吉 知子 教授

6．音楽学科　2017年12月６日
「音楽が生まれる瞬間（とき）」
大野 和子 専任講師
安藤 史子 非常勤講師

7．英文学科　2018年１月18日
“A Discussion of the Q-survey Method for Research and Class Evaluations”
Shawn BANASICK 教授

◇専門研究会

・2017年５月１日
「合奏専門教育の将来について
―リスト音楽院のカリキュラムから―」
札幌大谷大学　非常勤講師
陣内　直 氏

・2017年９月28日
「21世紀の日本の音楽大学・学部に求められていること」　国立音楽大学教授・副学長
久保田 慶一 氏

・2018年１月19日
「大学教育におけるアクティブラーニングの活用」
公立鳥取環境大学 環境学部 講師
山口　創 氏

◇助成・補助

出版助成	３件
研究助成	５件
総合研究助成	４件
研究補助	１件
専門研究会補助	３件
専門部会研究発表会補助	７件
国際学会出張補助	５件

◇発行物

『論集』第64巻第１号（通巻第178号）2017年６月発行
『論集』第64巻第２号（通巻第179号）2017年12月発行

（研究所）

女性学インスティチュート活動報告

◇特別講演会 2017年４月21日

「LGBTI（いわゆる性的少数者）の権利保障をめぐって
——国際比較から見る日本の課題」
奈良女子大学
副学長、研究院生活環境科学系教授
三成 美保 氏

◇連続セミナー
テーマ「女性学と男性学」（全４回）

〈第１回〉2017年５月19日
「男性学の提起する諸問題」
高村 峰生 英文学科准教授

〈第２回〉2017年５月26日
「J-POP に反映された若者たちのゆくえ」
難波江 和英 総合文化学科教授

〈第３回〉2017年６月２日
「生物学から見るメスとオス」
遠藤 知二 環境・バイオサイエンス学科教授

〈第４回〉2017年６月９日
「『ジェンダーレス男子』が拓く明るい未来？」
奥野 佐矢子 総合文化学科准教授

◇研究会
〈第１回〉2017年６月23日
・「スポーツにおける「性別問題」
—「女性」アスリートに向けられるまなざし—」
小坂 美保 体育研究室専任講師

・「バングラデシュ農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のための NGO との共同研究
—アンケート調査の分析からみる農村女性の実態
奈良女子大学 研究院人文科学系准教授
浅田 晴久 氏

〈第２回〉2017年９月29日
・「日本中世における「母」」
栗山 圭子 総合文化学科専任講師

・早期教育の隆盛は現代中国に何をもたらすか？
—家族・ジェンダー観から読み解く—
奈良女子大学
アジア・ジェンダー文化学研究センター特任助教
磯部 香 氏

◇学生懸賞論文（第19回女性学インスティチュート賞）
３編応募。
最優秀賞該当なし。優秀賞２編。

〈優秀賞〉
・山本 智美さん（人間科学研究科在学中）
「医療と女性
—性差からアルツハイマー型認知症の細胞モデルまで—」

・齋藤 奈都美さん（音楽研究科修了）
「知られざるセシル・シャミナードの世界
—《六つの演奏会用練習曲》作品35全曲演奏に向けての一考察—」

◇授業
Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」
Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」
Cu235(1) 「ジェンダー・スタディーズ（Ⅰ）」
Cu335(2) 「ジェンダー・スタディーズ（Ⅱ）」

◇発行物
『女性学評論』第32号（2018年３月発行）

（女性学インスティチュート）

＜私の研究＞

細胞と一緒に温泉につかる！

西田　昌司

私の研究室では、細胞のストレス応答を研究しています。ストレスと聞くと精神的なストレスを思い浮かべるかもしれませんが、もともとは工学用語で、外力によってバネが歪むような現象を指す言葉です。人体を作る最小の単位である細胞も、様々な要因によってストレスを生じますが、それが昂じると障害され、最終的には細胞死に陥ります。

しかしバネと同様に、ストレスが生じた細胞はそれを跳ね返すストレス応答を起こして対処します。ストレス応答には、細胞のサイズを変える肥大や萎縮、細胞分裂で数を増やす過形成などが知られています。最近では「アポトーシス」というプログラムされた細胞死（自殺と呼ばれることもあります）によって、あえて数を減らしてストレスをやり過ごすこともわかってきました。

このようなストレス応答を利用すると、細胞を鍛えて強い体を作ることも可能だと考えられます。たとえば運動負荷を加えると筋細胞は肥大によって対処し、その結果、運動能力が増加します。温熱負荷も細胞に様々なストレス応答を起こすことがわかってきました。42℃程度の「ヒートショック」を加えることで、ストレス蛋白質と呼ばれる一群の物質が細胞内に誘導され、血管の細胞では動脈硬化に対する耐性が生じたり、皮膚の細胞ではターンオーバーが亢進したりします。

温泉やサウナは健康に良いと言われますが、その原因は明らかではありません。ひょっとすると温熱負荷に対する全身の細胞のストレス応答が、体に良い様々な影響を引き起こしている可能性も考えられます。神経細胞や免疫細胞に温熱負荷をかけ、アルツハイマー病や病原体への抵抗力が増大しないか、細胞の変化を実験する毎日が続いています。

（環境・バイオサイエンス学科教授）

私の研究

田岡　千明

私の研究内容は言語学と英語教育の二分野となります。言語学について述べますと、元々、言語の意味構造と文法関係の結びつきに興味を持ち、認知意味論と呼ばれる分野で動詞の相と項構造を分析していました。動詞のある特定の文法構造での現れ方から事象構造を探り出すという意味研究を行っていました。英語と仏語、英語と日本語の比較、さらにオランダ語やアイスランド語のネイティブである言語学者と共に複数の他言語との対照研究にも携わっていました。

英語教育に関しては、言語学で得た知見を基に長年の英語教師の経験を活かし研究を行っています。最初は英作文における動詞関連（時制や態）の誤用分析に始まりましたが、現在は英語のアカデミックスキルを測る TOEFL iBT や IELTS で求められる300語程度の Essay に関してそのトピック分析や評価方法（ルーブリック）の違い、学習者の英文に散見される論理的なミスについて分析・考察しています。今後はトピックと CEFR ランクと結び付け、読み・聞いて書く統合的タスクの評価方法をライティング研究に取り入れていく予定です。また、最近では学習者の動機付けに関する研究も行っています。何が英語学習者の学習意欲を高め、何が失わせるのか、成功する語学学習者の特徴について、本学学生の協力を得て分析しています。

グローバル化が進むにつれ明確な理由を述べ相手を説得する能力の必要性が高まってきています。ある程度の文法力を基礎とした通じる英語で、そして国際社会で通用する論理的思考と表現力で、学習者が自分の専門分野や世界の問題について意見を発信できるようになるよう、英語教育の向上に貢献できればこれ以上の喜びはありません。

（共通英語教育研究センター専任講師）

＜ゼミ紹介＞

学び続けること

三杉　圭子

私のゼミではアメリカの文化と文学を通してアメリカという国や社会、そしてそこに住む人々について考えています。アメリカについての情報はどこにでもあふれています。ディズニーランドやハリウッド映画、ヒップホップ音楽やファッションはとても身近なものになっています。けれど、それらを単に消費するのではなく、批評的精神に基づいて分析、解読することが大切ではないでしょうか。

ゼミで執筆する卒業論文は、大学生活の集大成として納得のゆくものを書いてほしいと思っています。テーマは各自が自由に選びますが、19世紀の小説における宗教問題からマリリン・モンローまで多様です。なかでもアメリカの人種問題や女性の生き方に興味を持つ方は多く、最近はアフリカ系女性ノーベル賞作家トニ・モリソンの作品が頻繁に取り上げられています。人種でもジェンダーでも二重にマイノリティの立場にある作家が、それらの問題を類い稀な表現力をもって作品に昇華しているからでしょうか。そういったテーマ、作品と向き合うことで、アメリカの歴史と社会について理解を深めるだけでなく、日本における差別問題と比較したり、自ら女性として生きることについて改めて考えるきっかけになればと思います。

ゼミで身につけてほしいのは自分の頭で考える学びの姿勢です。大学を卒業してもより良く生きるためにそれぞれの学びを続けてほしいと思っています。

（総合文化学科教授）

卒論発表会でのポスター発表

春は筍、秋には船出

矢野　円郁

私は本学にきて５年になります。産休でゼミ生を募集しなかった年もありましたが、現在は学部生のほか、院生が２名おり、賑やかなゼミになっています。初年度はたった６名のゼミ生でしたので、すぐに全員が仲良くなりましたが、翌年最大の13名が入ってきた時は、全員が自由に意見を言い合える仲になるまでかなりの時間がかかりました。そこで、次の学年からは、いきなり文献講読を始めず、最初のゼミ活動を筍掘りにしました。日々、筍の山に登っているのに、３年生になっても筍を掘ったことがない学生がほとんどです。まだ名前も覚えていない仲間と、ちょっと汗ばむ初めての共同作業をすることで、話しやすい雰囲気ができるので、毎年、筍の力を借りて矢野ゼミはスタートします。

３年生前期には、心理学の専門誌に掲載されている論文を批判的に読みながら、自身の研究テーマを探します。個人の卒論研究をスタートする前に、数名でのグループ研究を実施して、研究計画の立て方やデータのとり方などを実践的に学びます。

秋には、神戸大学海事科学部の練習船（深江丸）に乗る機会を設け、船を安全に走らせるための船内および船どうしのコミュニケーションの方法などを体験的に学ぶ課外活動も取り入れています。

卒業研究は、自分のオリジナルのデータを収集することを原則にしていますが、テーマは自由に選んでもらっています。なるべく教員がしきらず、学生が協力しあって運営できるゼミを目指しています。

（心理・行動科学科准教授）

タケノコ掘りの様子

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **お料理研究部**

文学部 英文学科　３年生

お料理研究部の挑戦

お料理研究部は各学年10名の部員で構成されています。主な活動は、月に一回季節折々の旬の食材を活かしたメニューを考え調理に取り組むことです。またクリスマスやハロウィンといった行事食にも挑戦しながら「食」の大切さや楽しさについて考えています。春のバザーでは毎年趣向を凝らした唐揚げを、学祭では、お料理研究部伝統のパエリアを販売し好評をいただいております。

そんな私たちは、昨年度から神戸市主催の「にさんがろくプロジェクト」という農漁業の生産者、神戸の企業そして私たち学生の三者が連携して神戸の魅力を発信するものづくりの取り組みに挑戦しています。

昨年は桃の農家と舞子ビラホテルと私たちお料理研究部で、デザートを考案しました。ドーム型のチョコレートにあつあつの甘酒ソースをかけると中からハート型のケーキが登場するという斬新なデザインは、審査員の評価をいただき特別賞を受賞しました。

今年は泉酒造と幸愛化学という化粧品メーカーとともに、大吟醸の酒粕から抽出した成分から美容のフェイスパックの開発に取り組みました。惜しくも受賞は逃しましたが、実際に商品化が決定し、継続して商品開発に携わっています。

こうした取り組みへの参加は、コスト面や宣伝、流通というところまで考え、実践的な社会勉強となります。積極的にこのようなチャンスに取り組み、今後もお料理研究部の活動の幅をますます広げていきたいです。

桃スイーツと特別賞

［クラブ］ **バスケットボール部**

部長

私たちバスケットボール部は、毎週火曜日、木曜日、土曜日に第三体育館アリーナで活動しています。現在部員は１回生７名、２回生３名、３回生２名の合計12名です。中高でバスケットボールを習っていた経験者もいれば、中には大学から始めた初心者も数名います。プレーヤー９名とマネージャー３名で楽しく練習に励んでいます。

バスケットボール部は一年を通して様々な活動をしています。主な活動としては、毎年５月に行われる愛校バザーへの出店、６月と11月に行われる OG 戦、毎年４月と８月には関西女子学生バスケットボール連盟のリーグ戦に出場しています。夏休みには、岡田山ロッジで１泊２日の合宿を行います。

岡田山祭では、毎年たませんを販売しています。部員全員で協力して取り組むことで、チーム内での仲もより深まります。学年の壁を越えて本当に仲の良い部活です。毎年 OG さんをはじめ多くの方が買いに来てくださり、恒例の行事の一つになっています。

このように、経験者初心者関係なくみんなで切磋琢磨しながら練習や行事に取り組んでいます。最近では部員の提案する新しい練習メニューを積極的に取り入れたりしてさらなる飛躍を目指し励んでいます。これからもバスケットボール部をよろしくお願いします。

試合の時はこのユニフォームを着ます

学生の活動紹介
（コンクール受賞、学会発表など）

第14回ベガ新人演奏会　優秀演奏賞
（2017年６月29日）
大学院 音楽研究科 １年生（声楽専攻）

第９回東京国際声楽コンクール　兵庫大会
新進声楽家部門　優秀賞　（2017年７月８日）
大学院 音楽研究科 １年生（声楽専攻）

第19回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA
大阪地区大会　大学生部門　銅賞（金賞、銀賞該当者なし）全国大会出場通過　（2017年11月25日）
音楽学部 音楽学科 ３年生（ピアノ専攻）

第11回ベーテン音楽コンクール　自由曲コース
声楽部門（全国大会）　大学・院生Ａの部
ベスト10賞　（2017年12月22日）
音楽学部 音楽学科 ２年生（声楽専攻）

第23回 KOBE国際音楽コンクール
ピアノＣ部門　奨励賞　（2018年１月８日）
音楽学部 音楽学科 ４年生（ピアノ専攻）

第６回みおつくし音楽祭
大阪クラシックコンクール　ピアノ部門一般の部
大阪市長賞　（2018年１月８日）
音楽学部 音楽学科 ４年生（ピアノ専攻）

第58回日本動物園水族館教育研究会（大阪大会）
発表　（2017年11月）
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 ４年生
（自然環境教育学）

日本心理学会第81回大会ポスター発表
（2017年９月21日，久留米）
「危険な自転車の乗り方をする人には共通した特徴があるのか？」
大学院 人間科学研究科 M2（人間行動学分野）

日本人間工学会東海支部2017年研究大会口頭発表
優秀奨励賞受賞　（2017年10月21日，名古屋）
「交通場面のリスク認知教育における映像の効果
―車から見た無灯火自転車の映像を用いて―」
大学院 人間科学研究科 M2（人間行動学分野）

日本心理臨床学会第36回大会でのポスター発表
（2017年11月20日，横浜）
「大学生の友人関係の特徴とインターネット利用行動との関連」
大学院 人間科学研究科 研修生（臨床心理）
（指導教員の須藤准教授と連名での発表）

日本心理臨床学会第36回大会でのポスター発表
（2017年11月18日，横浜）
「二者間の同質的演奏による気分変化
―ハンドクラッピングによるリズム演奏を用いて―」
大学院 人間科学研究科 研修生（臨床心理）
（指導教員の國吉教授と連名での発表）

中高部報告

キャリアガイダンス・プログラム

本年度第１回は12月13日（水）、講師に高坂佳郁子姉、平松亜矢子姉をお迎えした。今回の講師依頼ではKC法曹会のご助力を賜った。高坂先生、平松先生は中高部をご卒業の後、大学は法学部に進学されて弁護士資格を取得。高坂先生は弁護士、また平松先生は弁護士としてお働きの後現在国税不服審判官としてご活躍中である。

最初に講師の先生方と全校生とで一緒に礼拝を守り、続いて先生方からご講演をいただいた。大学、司法試験、司法修習生時代、そして弁護士、国税不服審判官のお仕事について、また現在のご自分と中高時代とのつながりについて、生徒たちにわかりやすい言葉で話してくださり、生徒たちは熱心に先輩方のお話に耳を傾けた。

講演後、Ｊ３、Ｓ１、Ｓ２の３学年は、学年ごとに先生方と質疑応答のセッションを持った。「裁判関係のテレビドラマは実際の弁護士のお仕事と同じですか？」、「裁判に関わって恨みを買ったりすることはありますか？」などと生徒たちが質問すると、先生方はそれに丁寧に応えてくださった。

講師の先生方からも、この機会に自分の中高時代や歩んできた道を振り返ることができた。後輩たちとの出会いに感謝しているというコメントをいただいた。

第２回は2018年３月15日（木）、第二次世界大戦中に神戸女学院高女部で学校生活を送られた中條順子姉をお迎えし、戦時下の神戸女学院生とそれから今日までの人生についてご講演いただく。

（教務課キャリアガイダンス係）

エコノミクス甲子園に出場して

高等学部　２年生

私たちは12月17日日曜日に池田泉州銀行三田情報センターにて開催されたエコノミクス甲子園兵庫大会に出場しました。エコノミクス甲子園とは、高校生が金融知力を身に付け、その力を競うという趣旨のクイズ大会です。まず、県単位の予選が行われ、２月に東京で全国大会が開催されます。兵庫大会は、三ノ宮駅に集合し、そこからバスで移動。会場に到着したのち、開会式が行われました。予選では筆記試験と早押しクイズが行われます。上位６チームが決勝に進むことができ、決勝では、資産運用のシステムを模したフリップクイズが行われました。昨年度出場した時は、予選で敗退してしまったため、今回こそはと臨んだ大会だったので、優勝することができとても嬉しかったと同時に驚きのほうが大きかったです。そして、私たちは２月16日から18日にかけて行われた全国大会に出場しました。全国大会では、プレゼンや筆記クイズ、金融システムを模したクイズで金融知力を競います。結果は予選敗退と振るわなかったものの、全国から予選を勝ち抜き集まった高校生と密度の濃い３日間を過ごすことができました。また、第一線で活躍しておられる金融機関の方や、起業家の方々と直接お話しする機会があり、とても勉強になりました。もし、この大会に興味をもってくれた後輩さんがいれば声をかけてください。全力でサポートします。関わってくださったすべての方に感謝します。ありがとうございました。

高校生科学技術チャレンジに参加して

高等学部　３年生

この度私は第15回高校生科学技術チャレンジ（通称 JSEC）に参加し、優等賞をいただきました。JSEC とは朝日新聞社、テレビ朝日が主催で開始した科学技術の自由研究コンテストです。レポートによる一次審査を通過し、最終審査にて研究発表を行いました。研究のタイトルは「大気エアロゾルの調査における天体測光学的手法の応用」です。具体的には、市販のデジタル一眼カメラを用いて星の減光から大気の状態を推定するという新たな方法の開発を目指す研究です。きっかけは、星を眺めていると日によって星の見かけの明るさが違うことに気付いたからです。それから３年ほど天文台の先生にメールで指導していただき自宅で観測し解析しながら研究を進めました。初めは全く先が見えない中手法を暗中模索する日々が続きました。やっと準備が整い固定撮影を行ったものの、撮影方法の精度に限界があり、うまくいきませんでした。もう駄目かと思いましたが、追尾撮影に変えると見事に大気の状態の変化が見えてきました。その時、今までの長い苦労が一気に報われたような感動と興奮でいてもたってもいられませんでした。折角なので高校生活の最後にこの結果をまとめ JSEC で発表することにしました。JSEC では様々な分野の方が私の研究に興味を持ってくださりとても嬉しかったです。また、プレゼンテーション力を培うことができました。新たな発見を楽しみに、これからも研究を進めていきたいと思います。

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、Ｊ２とＳ２は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選作を決定した。また、校内選考で決定された優秀作は兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選２名、入選３名、佳作１名に入賞した。

11月28日（火）の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、Ｓ２Ｃの生徒が自作の朗読をした。

（中高部図書室司書教諭）

＜留学報告＞

留学報告

高等学部　２年生

私は2017年１月から11月まで10か月間、ニュージーランド、ダニーデンにある Otago girls' High School に留学しました。

楽しみにしていた留学でしたが、最初は苦労の連続でした。現地の友達を作りたいと思った私は、自ら輪に飛び込む努力をしましたが、なかなか相手にしてもらえませんでした。それでも諦めずに努力を重ね、４か月ほど経った頃やっと友達ができました。前半は友達作りにおいて辛いことの方が多い日々でしたが、これ以降はかけがえのない日々となりました。学校では休み時間がとても楽しく、友達との英語の会話を通して、めきめき会話力も伸びていったと思います。初めはハイスピードの会話に愛想笑いをすることも多かったですが、気づけば聞き取れるようになっていて、英語でのジョークや自分の話など、自由に話せるようになっていました。

彼女たちは、私のことを留学生の特別な友達ではなく、自分たちと同じ普通の友人として扱ってくれたように思います。学校帰りに一緒に遊び、たまにはカラオケに行き、休みの日に自宅に招いてくれ、11月の私の誕生日にはパーティを開いてくれました。帰国の時にはみんなで空港まで見送りに来てくれ、再会を固く約束しました。キャンプに行ったりスキートリップに行ったり、自然豊かなニュージーランドでは初めての経験もたくさんしましたが、私にとってはこの日常のたわいない友達との触れ合いが、私の留学において一番大きく大切な財産です。

Heart and Soul

高等学部　２年生

留学で重要なものは何でしょうか。英語力やコミュニケーション能力を思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。しかし私は「帰れる場所がある」ということが一番大切だと思うのです。

私が一番悩まされたことは友達作りでした。当たり前に友達がいるという環境で４年間も過ごしてきた私には、すでにグループができている状態で言葉も満足にしゃべれず、友達を作ることは困難でした。また、頑張って話しかけてみても次会ったときには知らないふりをされていたりしていました。そのため、最初の１、２ヶ月は意地で学校に行っていたように思います。３ヶ月程すると同級生も慣れて普通に接してくれるようになり、友達も増え、学校も楽しくなっていき、すごく楽しい留学生活でした。

しかし、楽しかったといっても無意識のうちに緊張していたのだと思います。帰国して、皆に「おかえり」と言ってもらった瞬間肩の力が抜けました。ここには私の居場所があるのだと安心しました。

世界に出て行くのはとても重要なことだと思います。実際私は留学中に日本では決してできないような貴重な経験をたくさんしましたし、心身ともに成長しました。しかし、私が頑張れたのは帰れる場所があったからこそだと思います。留学してその温かみをひしひしと感じました。帰国後温かく迎えてくれた同級生や先生方、家族に感謝します。

釜ヶ崎訪問を終えて

高等学部　２年生

いこい食堂の目と鼻の先にある公園で作ったご飯を配っているとき、お礼を言ってくれる人、目を合わせてくれない人、興味津々に話しかけてくる人など様々だったが、他人との距離の取り方がわからないのかなと思う人が多かった。今までに自分のことを深く理解してくれる誰かがいなかったからだろうか。だとするとそれはとてもさみしいことだと思った。

誰であれ、違う境遇のもとに生きてきていてお互いに知らない苦労や苦しさも抱えているけれど、そのことに気づけないこともある。自分と違ったりわからないと思ってしまうとその人を激しく拒絶してしまったりもする。見た目や職業ではその人の内面の何も判断することはできないのに今や社会ではそれがその人の価値を決定するものさしのようになっている。「釜ヶ崎の人」というとき自分といったい何を区別しているのだろう？どこにくらしている人だって私たちと同じように豊かな内面をもっているし、線で区切って見る必要などないと思うのに現実は厳しい。釜ヶ崎も社会の変動とともに暮らしにくくなっていると聞いた。

ご飯を作って、食べてもらって、人と人のつながりを微かに感じて、おじさんたちのことを身近に感じている気になっても、彼らの直面している暗闇や根本的な問題はもっと深刻でつらいものだと思う。それでも、重荷を全て共有することはなくても、理解しようとして寄り添う気持ちが少しでも助けになるのだと思いたい。

憧れの冬山スキー

今年度の冬山スキーも、志賀高原の宿舎から目の前にある「オコジョの森スキー場」を起点に行われました。そして、リフト乗り放題の学校券を教師陣が駆使し「一ノ瀬ファミリー」「ダイヤモンド」「寺子屋」「東館」「西館」の各々に特徴のあるゲレンデを駆け巡りました。

スタートは12月21日に西宮北口からでした。Ｊ３からＳ２の生徒45名と教員10名は、雪の多いスキー場に降り立つことを願いながらバスに乗っていました。８時間バスに揺られ、やっとの思いで到着しました。それでもすぐに、宿舎前のリフトが初日から動くことに感謝しました。スキー２日目には、志賀高原全域のスキー場がグランドオープンし、全てのリフトが動いたのはなによりでした。

「天気がいい→たくさん滑れる→楽しい→上達」の法則があったのかもしれません。

「雪合戦をする者」「澄んだ空気の夜空の満天の星に目をやる者」スキー以外にも感動できることは、この大自然の雪山には豊富にあるようです。また、驚きもあり「ニホンザルが部屋に入ってくるので、窓は開けっぱなしにしないように！」と宿の主人から注意を受けました。

学校の教員のみでスキーを指導し、生徒と協力しながら作り上げていく冬山スキーは素晴らしく、いつまでも生徒の憧れであり続けてほしいと願っています。

（冬山スキーディレクター）

卒業生シリーズ礼拝報告

中高部では毎年「卒業生シリーズ」の礼拝を守ってまいりました。

今年は４人の卒業生をお招きしました。全員が大学生だったので在校生にとっては中高部での姿を知っている身近な先輩からの奨励を聞く機会となりました。

中子和音氏は大学入試の経験から、「置かれた場所で咲く」ということの意味を考えた経験を語ってくださいました。その時点では挫折や失敗に思えるような出来事であっても、それを通過点とすることで、取り組み方や捉え方を変えることができるのではないか、というお話によって学院生活を振り返る機会を与えられました。

七條ありさ氏は中高部時代に「自分の生きている世界が狭いのだということ」を意識し続けることを学んだと話してくださいました。奨励の中で引用された「人間は自己に対する義務を負うが、それよりももっと大きい他者への義務を負っているのであり、その義務はどこまで及ぶものであるか、考えてみる必要がある」(W.バークレー) という言葉から、より広い視野で世界を見渡そうと試みることの大切さを思わされました。

尾立琴美氏からは人生観というものは誰によっても否定されるべきものではないということ、自分が目指している道があるならばその道を邁進することの大切さを語っていただきました。「目標に向かって懸命に勉強した」という話は、存分に学べる環境にいる者としての本分を思い起こさせてくれるものでした。

今回の報告には間に合いませんでしたが３月５日には中村眞子氏を迎えての礼拝を守りました。

中高部では卒業生から学ぶ機会をもとうと考えて、キャリアガイダンスや宗教強調週間での放課後特別プログラム「白熱教室」という企画でも卒業生との語らいの会を守っています。卒業生の活躍ぶりは在校生にとっては大きな励みになっています。また、卒業生が語る学院生活の意義は、在校生にとっては自らの歩みを振り返るためのきっかけになっていると感じます。時折、在校中や卒業後の苦悩や迷い、挫折の経験が語られることもあります。卒業生の語るこうした言葉にも多くの生徒が共感し、希望を抱いているようです。

「毎朝の礼拝は自分とは違う経験、物語に耳を傾ける機会であった。１年間に200人以上の物語に触れながら自分自身を問う機会だと考えるとその価値が分かると思います」

「毎朝、同じリズムで繰り返してゆくからこそ気づける事柄というものがある」

「ちょっとしたことで崩れてしまう静寂を全校生徒で守っていることにも価値がある」

こんな風に語る卒業生の言葉が、日々の礼拝の意義を思い起こさせてくれています。

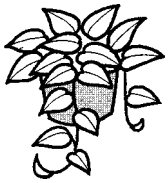
中高部では「礼拝前の静寂を大切にしよう」という呼びかけがなされており、礼拝開始までの数分間は全校生徒でパイプオルガンの前奏に心を響かせています。この呼びかけも、礼拝前の静寂を祈りのための静寂として語る先輩たちがいたからこそもたらされたものであるということを確かめてゆきたいと考えています。

「あなたの隣には家族や友人のために祈っている人がいるかもしれません。いつかあなた自身が家族や友人のために祈る時がくるかもしれません。だからこそ、礼拝前の静寂を大切にしましょう」という呼びかけが生徒自身によってなされ、その呼びかけに応えるようにして静寂の時が守られ、今の時代に受け継がれているのだということを折に触れて確かめてゆきたいと願っています。

卒業生シリーズの担当者の多くの者が在校中に使っていた聖書、讃美歌を家庭科の授業で作った鞄に入れて持参してくれます。進学先の下宿にも聖書、讃美歌を持っていったという生徒も少なくありません。そうした姿に触れながら、在校中に出会った聖句や讃美歌が卒業後の人生においてもよき導きをなしているのだと感じます。

卒業生シリーズのような機会を通して、これからも学院生活の意義や価値を確かめてゆきたいと願っています。

（中高部チャプレン）



＜先輩からのメッセージ＞

岡田山から、海外へ

豊嶋　絵美
（中高部、人間科学部人間科学科卒業生）

民間企業に約５年間勤務したのちに一大決心をして参加した青年海外協力隊。私が中学生の頃に、現職参加で協力隊に参加していた神戸女学院教諭の話を聞き、いつか自分も、というのが一つの夢でした。「与えた以上に、与えられることが多かった」と感じた青年海外協力隊としてインドネシアで過ごした日々は、充実していたものの、専門性、語学力、交渉能力等、様々なことに力不足を感じることも多く、アマチュアとしてではなく、プロフェッショナルとして国際協力の世界で働こうと決心したのは30歳を目前にした時でした。協力隊から帰国後、英国大学院留学を経て今は国際協力の業界で途上国の環境保全に携わっています。

ところで、アフリカと聞いて何を思い浮かべるでしょうか。貧困や病気、治安の悪さなどでしょうか。それはどこから得たイメージでしょうか。アフリカと一言にいっても、それぞれの国ごとに特徴があり、また一つの国の中でも地域ごとに違った文化があります。現在の仕事を始めてからアフリカの国々に行く機会を何度か得ましたが、その度に新たな魅力をみつけ、そこに住む人の笑顔や、美しい空の色に惹きつけられます。

神戸女学院では、授業や日々の礼拝、友人や先輩後輩、そして先生方との交流の中で海外の話を聞く機会が多くあります。学生の皆様には是非、様々な国の話を聞いて興味を持ち、そしていつか実際に訪れて自分の五感で世界の広さを実感していただければと思います。

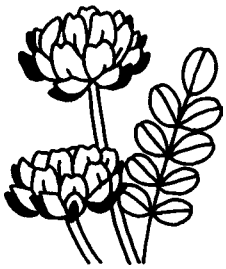
野生のコーヒーを用いた森林保全プロジェクト（エチオピア）の現場にて

2018年度中学部入学試験結果報告

日程：2018年１月13日（土）・15日（月）

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	249	248	159	150

（中高部事務室）



第52回中高部長賞
第33回文化・スポーツ賞

今年度の第52回中高部長賞表彰式は2017年12月20日(水)の２学期終業日に行われ、Ｊは演劇研究部、バレーボール部の２クラブ、Ｓは演劇研究部、ブラスバンド部、バスケットボール部の３クラブ、計５クラブが受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞の５千円が贈呈されました。

第33回文化・スポーツ賞表彰式は2018年１月30日(火)に行われ、受賞者には中高部長林先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化・スポーツ賞は、学校代表として各大会やコンクールへ参加し、顕著な成績をおさめた個人、団体に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第１位、兵庫県・近畿・全国で第３位以内とするものであり、選考委員で審議し受賞者をそれぞれ決定しました。

中高部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方々には表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

第52回中高部長賞

Ｊ演劇研究部、Ｊバレーボール部
Ｓ演劇研究部、Ｓブラスバンド部、
Ｓバスケットボール部

第33回文化賞（11名）

☆第26回日本数学オリンピック　ベスト４

☆第６回ヨーロッパ女子数学オリンピック（EGMO）スイス大会　銅賞

☆ ITC カウンスル No. 3 主催第６回高校生スピーチコンテスト　優勝

☆第50回私学の書展　特別賞

☆ The World Scholar's Cup Kyushu Round
団体２位　個人５位

☆ World Scholar's Cup 2017　団体銀メダル

☆ World Scholar's Cup 2017　団体銀メダル
個人金メダル

☆第37回近畿高等学校総合文化祭大阪大会小倉百人一首かるた部門大会　準優勝

☆アートフェスティバル2017　兵庫県知事賞

☆税の作文　西宮納税貯蓄組合連合会会長賞

☆税の書道　西宮・宝塚租税教育推進協議会賞

☆税の書道　西宮納税貯蓄組合連合会会長賞
（２名）

第33回スポーツ賞（18名）

☆第61回兵庫県中学校総合体育大会テニス競技
女子団体の部　準優勝　（10名）

☆第14回兵庫県中学校秋季テニス大会　団体戦　準優勝
第５回兵庫県中学校冬季テニス大会　団体戦　優勝
（10名）

（中高部教諭）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］　Ｊバドミントン部

一戦必笑―羽球を追え！

30名の大所帯であるＪバドミントン部の悩みの種は、コート不足です。コートの割り振りにいつも顧問と幹部が悩みながら、試行錯誤で練習しています。新年度を迎え、Ｊ１の新入部員が入部すると、部員数がさらに増えますが、「うまくなりたい！」「試合に勝ちたい！」という気持ちはみな同じ。厳しい練習の中でも楽しく元気よく、深い友情を培えるクラブであり続けたいと思います。

がんばれ、Ｊバドミントン部！

（Ｊバドミントン部顧問）

［クラブ］　Ｊコンピュータ部

Ｊコンピュータ部です。

私たちＪコンピュータ部は、現在部員数は11名（Ｊ１：８名、Ｊ２：３名）で、月曜日、火曜日、木曜日にコンピュータ教室で活動をしています。活動内容は、タイピング練習、ゲーム作り、プログラミングなどです。昨年11月のキャンパス見学会では、顔出しパネルを作り、来校者で希望する人に写真を撮り、はがきを作るということをしました。2018年度の文化祭には Miku Miku Dance で Miku を躍らせたいと考えています。みんなで一緒に何かコンピュータ部らしいことができたらいいなと考えています。

（Ｊコンピュータ部顧問）

［クラブ］　Ｓ手芸部

高等学部　２年生

Ｓ手芸部では、週２回編み物やミシンを使って手芸品制作などをしています。部員人数が少ないので、アットホームな雰囲気の中、毎回楽しく活動しています。愛校バザーでは部員手作りの手芸品の販売、文化祭では一人一着ずつ作った民族衣装の展示を行いました。今年は新たな試みとして、コンクールに応募もさせていただき、とてもいい経験となりました。

現在部員募集中です。興味を持ってくださった方は是非Ｓ手芸部へお越しください！

［クラブ］　Ｓ化学部

Ｓ化学部活動報告

Ｓ化学部では、部員が興味を持った研究や、化学の原理を応用した実験体験セットの作成を検討しています。研究では、金属イオンが生体に取り込まれる経路を解明するべく、金属イオンの濃度測定法から検討を進めています。将来的には、神戸女学院大学の先生方にもアドバイスをいただき、ディスカッションしながら研究を進めていきたいと考えています。また、スライムの販売を中心に行っていたバザーについても、人工イクラ実験セットの販売など、これまでにない実験体験セットの検討を行っています。

（Ｓ化学部顧問）

〈学 院 日 誌〉

1月9日(火)	中高部始業日
1月10日(水)	中高部教員会議
1月13日(土)・14日(日)	大学入試センター試験
1月13日(土)・15日(月)	中学部入学試験
1月19日(金)	教授会
1月24日(水)	理事会 中高部教員会議
1月29日(月)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期A日程〉
1月29日(月)～30日(火)	音楽学部一般入学試験〈前期A日程〉
1月30日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期B日程〉
2月7日(水)	中高部教員会議
2月14日(水)	教授会
2月16日(金)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期C・D日程〉
2月21日(水)	中高部教員会議
2月28日(水)	理事会
3月1日(木)	高等学部卒業式
3月5日(月)	教授会
3月7日(水)	文学部・人間科学部一般入学試験〈後期日程〉 中高部教員会議
3月16日(金)	大学卒業式、大学院修士学位記授与式
3月19日(月)	中高部教員会議
3月20日(火)	中学部卒業式、中高部終業式
3月21日(水・祝)	オープンキャンパス
3月28日(水)	理事会 評議員会 臨時理事会

目 次

院長退任のご挨拶……1
KCC だより ……3
次期院長に飯 謙教授 ……5
2018年度年間標語……5
＜追悼＞山内 祥史先生 ……6
クリスマス報告……7
創立者タルカット先生の母校、Miss Porter's School から訪問団をお迎えして…9
史料室の窓・神戸女学院不変の教育理念……16
キャンパスお気に入りの場所……18
大学報告
女子学生のためのキャリアフォーラム実行委員を終えて…19
この成功体験から得たもの……19
「KOBE にさんがろくプロジェクト」で特別賞をいただきました…20
2017年度音楽学部冬期講習会……20
大学ホームページを全面リニューアル……21
第8回絵本翻訳コンクール表彰式……21
2017年度音楽学部定期演奏会報告……22
第9回舞踊専攻卒業公演……23
2018年度大学入試結果中間報告(2/20現在)…44
派遣留学報告……45
2018年度夏期語学研修参加者募集……47
研究所活動報告……48
女性学インスティチュート活動報告……50
私の研究……51
ゼミ紹介……52
課外活動紹介……53
学生の活動紹介……54
中高部報告
キャリアガイダンス・プログラム……55
エコノミクス甲子園に出場して……55
高校生科学技術チャレンジに参加して……56
校内読書感想文コンクールについて……56
留学報告……58
釜ヶ崎訪問を終えて……59
憧れの冬山スキー……59
卒業生シリーズ礼拝報告……60
先輩からのメッセージ……61
2018年度中学部入学試験結果報告……61
第52回中高部長賞、第33回文化・スポーツ賞…62
課外活動紹介……63
学院日誌……64

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。
10, 17, 24, 36, 37, 42, 43